

ヘパリン起因性血小板減少症（HIT）

英語名：Heparin induced Thrombocytopenia

A. 患者の皆様へ



ここでご紹介している副作用は、まれなもので、必ず起こるというものではありません。ただ、副作用は気づかずに放置していると重くなり健康に影響を及ぼすことがあるので、早めに「気づいて」対処することが大切です。そこで、より安全な治療を行う上でも、本マニュアルを参考に、患者さんご自身、またはご家族に副作用の黄色信号として「副作用の初期症状」があることを知っていただき、気づいたら医師あるいは薬剤師に連絡してください。

抗凝固薬（血液を固まりにくくするお薬）であるヘパリンを使用している場合に（腎臓透析時にもヘパリンが使用されている場合があります。）、次のような症状が見られた時には、医師・薬剤師に連絡してください。

急に今までとは異なった症状として「急な呼吸困難」、「意識障害、けいれん、運動・感覚障害」、「四肢のはれ・疼痛・皮膚の色調の変化」などが現れた場合。

また、ヘパリン皮下注射をされている方で「注射の数日後から注射部位が赤くなってきた、押すと痛いしこりができてきた」場合。

1. きいんせいけっしょうばんげんしょうしょうヘパリン起因性血小板減少症とは？

ヘパリンを抗凝固薬として使用している方に発症することがあります。

突然に血小板数が減少し、さらに^{けっせんそくせん}血栓塞栓症状（血管がつまったために循環障害を来たし組織傷害を起こす状態）が起こります。

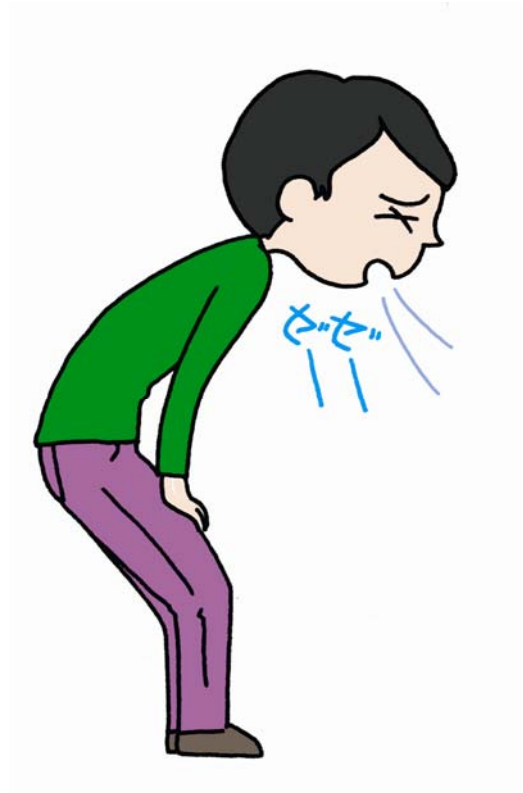
発生する場所は様々ですが、肺動脈がつまる肺塞栓の場合は呼吸困難、胸痛がおこり、手や足の血管がつまった場合は腫脹、疼痛、循環障害による皮膚色の変化が生じます。また、頭の血管がつまった脳梗塞では意識障害、けいれん、運動感覚障害などがおこり、心臓の血管がつまる心筋梗塞では胸痛、悪心、ショック症状、脈の乱れが起こるなど、血栓塞栓の起こる部位によって症状は異なります。

急に血小板の数が減少することが特徴で、ヘパリンを中止し他の作用機序をもつ薬剤による抗凝固療法を行うことにより回復します。

2. 早期発見と早期対応のポイント

ヘパリン治療を受けていることを認識しておくことが大切です。また、体内で使用されている医療器材に対する凝血防止のためにヘパリンが使用されている場合がありますので、確認しておきましょう。その上で、血栓塞栓症状に留意し、急に今までと異なった症状が出た場合は主治医に連絡してください。

主治医以外の医師に連絡する場合は、過去にヘパリン治療（特に3ヶ月以内）を受けたことがある旨報告してください。



※ 医薬品の販売名、添付文書の内容等を知りたい時は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構の医薬品医療機器情報提供ホームページの、「添付文書情報」から検索することができます。

(<http://www.info.pmda.go.jp/>)

また、薬の副作用により被害を受けた方への救済制度については、独立行政法人医薬品医療機器総合機構のホームページの「健康被害救済制度」に掲載されています。

(<http://www.pmda.go.jp/>)